魔導師がユメみたセカイ。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導師がユメみたセカイ。

【Ｎコード】
Ｎ６４３７Ｙ

【作者名】
津森太壱。

【あらすじ】
名もなき孤児の少年が出逢ったのは、守護者の名を継ぐ魔導師だった。彼に名を与えられた少年は、のちに「堅氷の魔導師」という国史上最強の力を有する魔導師となっていく。

０１　：　また魔導師が、遠きユメをみる。（前書き）

＊魔導師シリーズ短編の主人公「堅氷の魔導師」の始まりの物語でございます。

こんにちは。

新たに物語を書き連ねますこと、お許しくださいませ。

01 ： また魔導師が、遠きユメをみる。

目を覚ますと、そこには真っ白な天井が広がっていた。染み一つ、クモの巣一つなく、随分と清潔そうな天井だ。

「……目が覚めたのかい」

横から声がして、どうやらそれはこの清潔そうな部屋のあるじのようで、視線を泳がせる。視界に捉えたその姿に、少しだけ、ほんの少しだけ、畏怖を覚えた。

「だれ……」

艶のない白と灰色の髪、黒っぽい双眸、それは見たことのない配色だった。老人ならまだしも、こんな、自分よりいくらか歳上だろうという青年に、その色はあまりにも不似合いだ。

「……おまえ、話せるのかい」

無表情に見下ろしてくる顔は、ぱっとしたものは感じられないが、黒っぽい双眸の奥には底知れないなにかを感じる。均衡が取れた顔つきだが、その黒っぽい双眸のせいか、できれば直視したくない。だが、黒っぽい双眸は自分を視界に捉え、放そうとしない。

「話せるなら、それでいい。手間が省けるからね」

「……だ、れだ」
「おまえこそ、誰だい？」
畏怖を感じても、なぜか恐怖は感じない双眸に、軽く息を呑む。自然と身体が逃げを打ったが、不思議なことに腕にも脚にも力が入らなかった。
「な……んで」
「崖から転落すれば、まあ無事では済むまいよ。生きているだけでも奇跡だろうね」
「……がけ？」
「憶えていないのかい」
なんのことか、わからない。いや、それ以前に、自分がどうしてこんな状態になっているのかも、なぜ青年に覗きこまれているのかも、わからない。いったい自分になにが起こったというのだろう。
「状況確認もよいが、まずは教えなさい。おまえは誰だい？」
混乱した頭に、冷や水でも浴びせるかのように、青年は淡々と問うてくる。状況を確認することのほうが先であるように思うのだが、青年はそう思っていないらしい。
「お、れ……は」
誰、と青年に訊いておきながら、同じように問われても、答えられない自分がいる。
誰、と問われて、持っている答えなど、なかった。
「……名は？」

おれ、という自分に名前があるとしたら、それは「おまえ」とか「おい」とか、それこそ「おれ」だ。

「……ないのかい」

いつまでも答えないでいると、さらりと答えを見つけられた。

軽く唇を噛む。悔しいからではない。悲しいからではない。欲しかったと、憧れさえ抱く羨望のためだ。

名、というものは、平等に与えられるものではない。それが個人のために存在するものであるのなら、なおさら、平等というものや公平な言葉は、生きるすべての人間に与えられるわけではないのだ。

「わたしは、イーヴェ・ガディアン。守護者の名を継いだ魔導師だ」

「……いー、ヴぇ？」

「そう。おまえは……そうだね、カヤ、と呼ぼうか」

「は……？」

「白い髪、森色の瞳……天地の化身たる万緑の神、カヤディナイン。そこから名を頂戴して、カヤ。おまえにはちょうどよかろう」

随分と大層な名をつけられた気がする。けれども、名をつけられるその心地よさは、たまらなく胸をしめつけた。

「おれに、名を……くれるのか」

「要らなかったかい？」

反射的に沈黙し、だが、しっかりと首を左右に振った。

人間らしい扱いを受けたのは、初めてだ。それを素直に嬉しいと思う自分がいる。たとえ青年が、初対面で見ず知らずの人間でも、人間として扱ってくれるそのことに変わりはない。そして彼は、わ

ざわざ自分のために、「名」を考えてくれたのだ。名がないと不自由だと人はよく言っていたが、だからといって名を与えようとすることはないのである。あとが面倒になるとわかっているから、なければないままにしておくものなのだ。
彼は、あとの面倒など考えていないのかもしれない。考えなしに、ただ名をつけたのかもしれない。
それでも、名をつけられるというのは、嬉しいものだ。

「おまえが誰かわかったところで……」

青年、イーヴェという彼が、誰だと言ってきたのは名を知るためだけだったらしい。それ以外はどうでもいいのか、それまでじっと捉えていた目を反らすと、イーヴェは立ち上がった。

「食事にしようか、カヤ」

そうイーヴェが言ったとたん、美味しそうな香りが漂ってきた。なんていい香りだろう。なんて軟らかい匂いだろう。
なぜだか涙が溢れそうになった。

「……なんで、おれに、やさしく、する」
「優しい？　このわたしが？」
「名を、くれた。食事も、与えようとして、くれている」

涙をこらえ、動かない身体でどうにかイーヴェのほうへと向くと、小首を傾げたイーヴェが無表情を崩し、淡く微笑んでいた。

「おまえにわたしの名を継がせようと思う」
「……つが、せ？」
「優しさなどではないよ。わたしは、ただおまえの力を、憐れんで

いるだけだからね」
「ちから……って」
「おまえを魔導師にする」

そういえば、イーヴェは己れを「守護者の名を継いだ魔導師」だと言っていた。
魔導師とは、国に仕え、天地の災害などから国を護る、緑の力を有した異能者のことだ。

「おれが……魔導師に？」
「可哀想にね、カヤ」
「え……？」
「魔導師とは、セカイにユメみる、悲しい生きものだ」

自分の解釈が間違っているのか、それとも持っているその知識はイーヴェには通用しないのか。

「それでもわたしは、おまえを魔導師にするよ」

これは優しさなどではないのだと言ったイーヴェは、その黒っぽい双眸を細め、悲しげな顔をした。

「可哀想に……また魔導師が、遠きユメをみる」

その言葉を理解することはできなかったが、稀少な力を持ち重宝される魔導師という存在は、しかし人間として悲しい運命にあるのだろうと、漠然と思った。
そんな魔導師に、自分はなるらしい。イーヴェによれば、そこに拒否権はない。カヤ、と名づけられた自分は、名づけ親たるイーヴェによって、魔導師の道を歩まなければならないのだろう。

「今日からおまえは、カヤ・ガディアンだよ」

そっと撫でてくるイーヴェの手のひらは温かい。

今はそれでいいかと、先のことも考えず、カヤと名づけられた少年は瞼を閉じた。

０１　：　また魔導師が、遠きユメをみる。（後書き）

楽しんでいただければ幸いです。

02 ： この目に映る世界は。

怪我が癒えてからの日々は、イーヴェとの、対面での一般教養から始まった。文字を覚え、書く練習から、文章の構築、言葉の遣い回し、数字を使っての計算、容積の量り方、動植物の成長法則など、学校という貴族が通う場所で教えられるものすべてを、イーヴェに叩き込まれた。憶えられなくてつらいこともあったが、憶えると見ているものすべてが理解できるようになって、楽しくてならなかった。嬉しくてならなかった。だから、カヤはイーヴェとの対面の勉強が、嫌いではなかった。むしろ、のめり込んでいった。

そして、魔導師の力を引き出す訓練もまた、同時進行だった。とはいえ、それまで無意識的に使っていたこともあったようで、当たり前のようにやってみせると感心されることがたまにあった。

「もっと学びなさい。たくさん、吸収しなさい。その分だけ理解が広がれば、ほかにも理解できることが増えてくる」

イーヴェは厳しかった。けれども優しかった。容赦なく魔導師の力を揮うこととともあれば、温かくて美味しい食事を与え、ときには面白おかしい昔話を聞かせてくれた。

親というものを知らないカヤにとって、イーヴェは、時間が経つにつれ、親のような存在になっていった。

「イーヴェ」

「術式の構築中に無駄話とは大した度胸だ。なんだい、カヤ」
「これくらいどうということはない。あんたに訊きたいことがある」
「面白いくらい力のある子だね……なにを訊きたいのかな」

その日、カヤはイーヴェに教えられた、錬成陣を使っての力の発現を試みていたが、あっさりと錬成陣を使いこなしてしまうと、それを消してイーヴェを振り向いた。

「あんた、ずっとおれの面倒を看ているが、仕事はしてないのか？」

カヤはずっと、イーヴェの住まいだというところで、世話になっている。ふたりきりでの生活は、慎ましく静かで、穏やかだ。だが、カヤがイーヴェに拾われるまでそうであったように、人は働かなければ生きるためのものを得ることができないようになっている。カヤは働くよりもまずイーヴェによって教育を施されているが、それならイーヴェは働きに出るのがふつうだ。しかし、イーヴェはずっと、仮住まいだというこの家から出て行こうとしない。つまり、働きに出ていないのである。

「わたしは魔導師だよ。魔導師であることが、わたしの仕事だ」

魔導師とは、ひとたび天災が起これば問答無用で借り出され、また、その被害を最小限に留めるべく研究を重ね、日々調査のために各地へ派遣されると聞いた。
イーヴェはここでなにをしているのだろう。調査のようなことをしているふうでもなければ、ただカヤに教育を施しているだけだ。

「ああカヤ、ちょうどいい。雨が降ってきたようだよ」

ふと目を窓の向こうに向けたイーヴェに、このところ雨が降るた

びそうされるように、暗黙の命令を受ける。
カヤは、なぜか雨の日は、イーヴェによって容赦なく外に放り出されている。雨が降り出しそうな日も、イーヴェは無言でカヤの襟首を掴み、外に放り投げる。そして、扉という扉の鍵を閉め、窓を閉め、カヤを絶対に家に入れない。けれども、不思議と、そうやってカヤが外に放り出されても、雨に濡れても、長くて数十分、短ければ数分で、閉ざされた家の中に戻れた。
今日もまた、襟首を掴まれ引き摺られる。

「おい、放せ。自分の足で行く」
「もはや恒例行事だ」
「やめろ。首が苦しい。服が伸びる」
「ほら、お行きなさい」

イーヴェよりもまだまだ小さい身体は、呆気なく外に放り出され、降り出した雨を浴びた。汚れるよりもなによりも、軽々と持ち上げられ放り投げられることのほうに、カヤはひどく不快感を思う。
泥に汚れた手のひらを見つめて、ため息をついた。
自分の手のひらは、イーヴェに比べると随分小さい。それでも、こんな小さな手でも、働けと言われたらどんなことでもした。小さくても、働くことに不自由しない程度には、役に立った。

「……おれはまだ子どものままか」

イーヴェに、歳を訊かれたことがある。九つだと答えたら、嘘だろうと言われた。嘘なわけがない。産まれたときから数えている、九つの歳を超えたと言ってやったら、珍しくイーヴェは驚いていた。どうやら、産まれたその瞬間からの記憶を持つというのは、一般的にあり得ることではないらしい。赤ん坊の頃の記憶は、ほとんどが、忘れられてしまうものだという。だから憶えているなんてことは滅

多にないのだそうだ。
そろそろ十歳となるが、産まれたときからは大きくなっても、まだまだイーヴェには届かない手のひらに、カヤは息をつく。
頬に落ちてくる雨に不愉快を感じて、無造作に腕で拭った。泥で顔が汚れたが、洗えば汚れは落ちる。イーヴェは汚れるのが嫌いだから、二日に一回は必ず沐浴する。逆にカヤは、汚れているのが当たり前だったから、イーヴェに無理やり引っ張られない限りは沐浴しなかった。それでも、そんな毎日に慣れてきている自分がいる。
「今日はなにを思案しているのかね……？」
もはや聞き慣れた声音に、カヤは顔を上げる。
いつのまにか雨は止み、晴れ空が広がろうとしていた。天気が悪いとき、カヤが外に出ると、必ず雨は止む。今日も、その現象は十数分で起きたようだ。
「おれはまだ小さい……」
「当たり前だろう。まさか、自分がおとなだと思っているのかい？」
「いいや……ただ、この手のひらが、小さいままなのはいやだと、思った」
「そのうち大きくなる。おまえ、ここに来てどれくらいが経ったと思っているのだい？」
「半年くらい」
「その間に、おまえは確かに、成長している。子どものうちは子どもでいなさい。早くおとなになろうとする必要はないよ」
玄関の扉を開けたイーヴェが、おいで、と手招きする。服についた汚れを落としながら立ち上がると、カヤはイーヴェの手に招かれるまま、家に戻った。

「沐浴しておいで」
たまに思う。イーヴェは、自分を沐浴させるために、雨の日は必ず外に放り出すのではないかと。
「……イーヴェ」
「なんだい」
「おれは、このままここにいて、いいのか」
「なにを今さら。わたしは言ったはずだよ。おまえにわたしの名を継がせるとね」

この生活がいつまで続くかなんてわからない。イーヴェの気紛れかなにかで拾われたカヤは、カヤと名づけられても、この生活に慣れても、いつかまた人間としての生き方を失う可能性がある。考えたくもないと思っている自分に、随分と贅沢になったものだと思ったが、それならこの生活を護ればいいのだと、漠然とした願望が湧き上がる。
雨の日に必ず外に放り出されようとも、それは出て行けと言われているわけでも、二度と顔を見せるなと言われているわけでもない。必ずイーヴェは雨上がりにカヤを迎えにくるし、その後は沐浴させるために浴室に放り投げ、そうして温かい食事を与えてくれる。
これほど穏やかで静かな生活を、今まで経験したことがあっただろうか。それを得て、手放せるほど、カヤは人間というものを捨てたわけではない。
業が深くてなんだ、と思った。
生きたいのだ。
産まれた限り、生きることをやめたくはない。
「なんであんたは、おれに名を継がせたいんだ？」
「今は知らなくともよい。そのときがくれば、自ずと理解しよう。

だから、おまえは利用しなさい」
「利用？」
「わたしはおまえが愚かであるとは、一度も思ったことがないからね」
カヤの心に潜んだものを読みとったかのように、イーヴェはその無表情にうっすらと感情を乗せる。
「わたしを存分に利用し、得たいと思ったものを得るがいいよ。そして……」
はっきりとした笑みを浮かべたイーヴェが、黒っぽい双眸の奥に、仄暗い光りを宿らせた。
「わたしを殺すがいい」
望んでいるのだと、主張している双眸だった。
「……死にたい、のか」
思わず問うと、イーヴェは笑みを深めた。
「いいや」
「なら、なぜそんなことを言う」
微笑みながら言うことではないのに、さらに笑みを深め、問いに対し否定する意味が理解できなかった。
けれども。

「あの日……」

と、イーヴェは廊下の窓から晴れ上がった空を見上げた。

「レヒテンが、わたしを置いて逝った日……わたしの世界は白と黒に覆われた」

ぼんやりと呟かれた言葉に、軽く目を見開いた。

「世界の美しさを、わたしはもう二度と、目にすることはないだろう。この目は、レヒテンのいない世界を、拒絶したのだから」

それは、イーヴェの黒っぽい双眸が、色を失っているのだということを肯定する言葉だった。

「おまえもいずれ……そうなるのだろうね」

視線をカヤに戻したイーヴェは、色彩を手放してしまった双眸を細め、カヤの頭に手のひらを置く。

「まだ見えるのかい、カヤ」

そう、訊かれて。

まさか気づかれていたとは、思わなくて。

「なぜ……」

「見えているうちに、世界の美しさを、知っておくといい」

このところ目に覚えている違和感の正体が、崖から転落したときに負った怪我による後遺症なのだということを、イーヴェに教えら

れた。

そして。

「まあ、世界の美しさを真に知ることができたとき、おまえは絶望するかもしれないがね」

見ろと言っているのか、見るなと言っているのか、わけがわからないイーヴェに、そっと頭を撫でられた。

「だからいつか、わたしを殺しておくれ、カヤ」

「……なぜだ。なぜ、そんなことを」

「この目に映る世界は、美しくない。それが、悲しいからだよ」

死を望みながら、死を拒絶し、だが世界への悲しみを知った双眸は、瞳の奥にずっと、仄暗い光りを宿し続けた。

それが、出逢ったときに感じた畏怖の正体、だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6437y/

魔導師がユメみたセカイ。

2011年11月20日13時20分発行